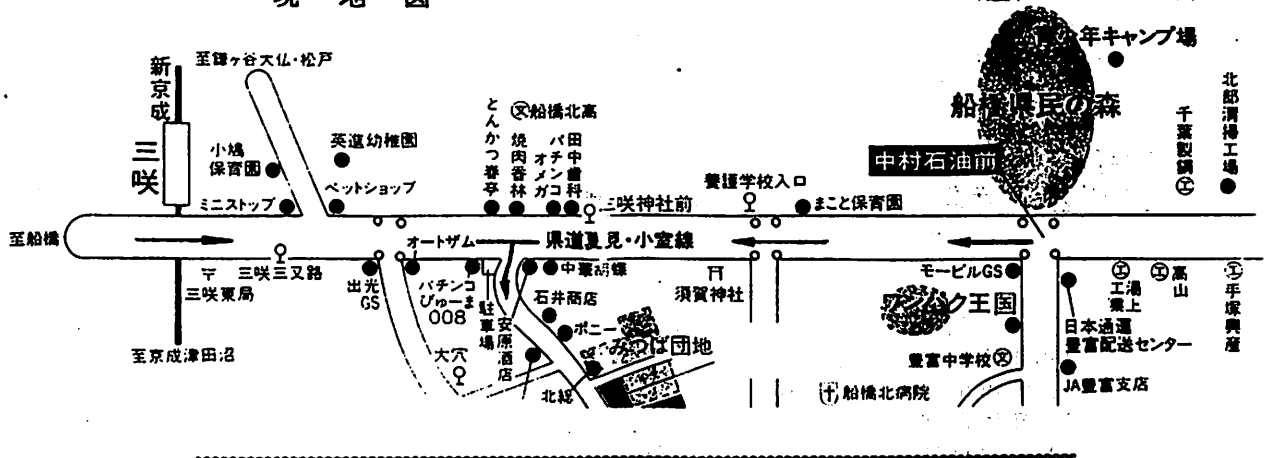


※ 1997年度 採集観察会 ※

場 所 : 千葉県船橋市 「船橋県民の森」
日 程 : 第2回 7月13日(日) 雨天決行!!
(以後第3回 10月19日 第4回 1998年2月22日)
集 合 : 「船橋県民の森」(通称「県民の森」)入り口
時 間 : 11:00
世話人 : 貞元己良 0474-74-8889 工藤泰恵 0471-32-6853
長井芳夫 0474-72-9700 和仁道大 043-237-9303
行き方 : 新京成電車(松戸～京成津田沼)の三咲駅下車、駅前
バス停から「県民の森」行きで約10分。

現 地 図



* 1997年度合宿 *

日程: 7月25日(金)～7月28日(月) 場所: 沖縄県 担当: 谷川明男
詳細はp. 4 参照

談話会通信 No. 91の原稿締切は8月末日です

東京蜘蛛談話会1996年度決算

科 目	収 入	支 出	備 考
会費	1,102,400		欄外①
寄付	16,092		
別刷り	48,280		
会誌作成繰越	240,000		
会誌作成		239,990	欄外②
会誌発送		59,580	欄外③
談話会通信		129,090	
報酬・その他の送料		28,417	各局通信事務費
事務一般費		4,625	封筒等
その他		15,000	故大熊先生へ生花
前納会費繰越総額		544,800	
97年度に繰越		385,270	
計	1,406,772	1,406,772	

特別会計	833,012	95年度決算時と同額
------	---------	------------

欄外

①96年度前納繰越	344,800
96年度当年度納入	212,800
97年度以降前納	544,800
計	1,102,400

②会誌印刷費	193,640
別刷り印刷費	46,350
計	239,990

③会員分発送費	57,300
別刷り分発送費	2,280
計	59,580

	総額	年度内受領
1997年度前納	316,000	179,600
1998年度前納	102,800	58,800
1999年度前納	50,400	28,000
2000年度前納	19,600	11,200
2001年度前納	16,800	8,400
2002年度前納	11,200	2,800
2003年度前納	8,400	2,800
2004年度前納	8,400	5,600
2005年度前納	8,400	5,600
2006年度前納	2,800	2,800
前納合計	544,800	305,600

97年3月31日現在の財政状況

郵便貯金 普通	129,576
定額	1,131,105
振替口座	611,097
手持ち	850
計	1,872,628

内訳	
96年度繰越	385,270
97年度以降会費前納	544,800
プール金(特別会計)	942,558

以上相違ありません。1997年4月20日

会計: 安田明雄 会計監査: 鈴木成生・笠原喜久雄

予算

東京蜘蛛談話会1997年度予算

科目	収入	支出	備考
会費	567,600		欄外①
前年度繰越	385,270		
プール金から繰入れ	187,630		
会誌作成		760,000	欄外②
会誌発送		226,800	欄外③
談話会通信		120,200	欄外④
報酬・その他の送料		28,500	欄外⑤
事務一般費		5,000	
計	1,140,500	1,140,500	

欄外	単価	数	計
① 会費	2,800	192	537,600
	2,000	15	30,000
計			567,600
② 71号	190,000	1	190,000
72号	190,000	1	190,000
73号	190,000	1	190,000
74号	190,000	1	190,000
計			760,000
③ 71号	270	210	56,700
72号	270	210	56,700
73号	270	210	56,700
74号	270	210	56,700
計			226,800
④ 通90号	17,000	1	17,000
通91号	17,000	1	17,000
通92号	17,000	1	17,000
90発送	90	210	18,900
91発送	90	210	18,900
92発送	90	210	18,900
例会はがき	50	250	12,500
計			120,200
⑤ 本部	2,000	1	2,000
事務局	5,000	1	5,000
編集	5,000	1	5,000
通信	6,500	1	6,500
その他送料	10,000	1	10,000
計			28,500

1997年4月20日 会計 安田明雄

1996年度会員動向
 1996年4月1日現在の会員数 209名
 入会5名、退会7名(希望5名、規約1名、逝去1名)
 1997年4月1日現在の会員数 207名(一般194名、学生15名) 別に休会1名

東京蜘蛛談話会 1997 年合宿について

東京蜘蛛談話会の 1997 年合宿を次のように沖縄で行います。主な観察ポイントは、名護市の旭川と与那の琉球大学付属演習林を考えています。参加希望の方でまだ申し込みをされていない方は大至急お願いいたします。

日程：1997 年 7 月 25 日（金）～ 7 月 28 日（月） 3 泊 4 日

宿泊：ビジネスホテル山田荘 名護市大東 1-9-6 TEL 0980-52-2272

費用：交通費＋旅行保険＋通信費＝58990 円（申し込み時に徴収）

宿泊費（朝食付）＝12300 円（現地で徴収） 27 日昼食弁当＝未定円（現地で徴収）

27 日以外の昼食，毎夕食は現地で各自支払い。

行程： ——— 飛行機 ——— 専用バス

7 月 25 日（金）羽田空港 9:45 集合

東京 ——— 那覇空港 ——— 中城公園 ——— 名護
11:00 JAL903 13:30 (観察採集)

夕食後名護城跡にて夜間観察

7 月 26 日（土）

名護 ——— 旭川 ——— 本部 ——— 海洋博記念公園 ——— 乙羽岳 ——— 名護
(観察採集) (昼食) (見学) (観察採集)

7 月 27 日（日）

名護 ——— 琉球大学与那演習林 ——— 名護
(観察採集)

夜は沖縄家庭料理「おかめ」にて懇親会（希望者）

7 月 28 日（月）

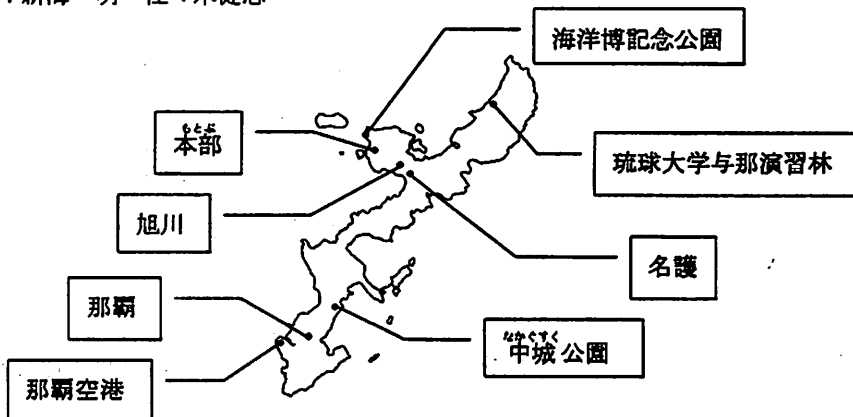
名護 ——— 那覇市国際通り ——— 那覇空港 ——— 東京
(買物・昼食など) 13:30 集合 14:40 JAL904 17:00

世話人（連絡先）：谷川明男

248 鎌倉市七里ガ浜東 2-3-1 県立七里ガ浜高等学校

現地案内人：新海 明・佐々木健志

合宿地略図



↑↑ 東京蜘蛛談話会総会例会報告 ↑↑

1997年4月20日(日) 10:00 ~16:28 目黒区駒場住区センターにて開催

司会進行: 平松毅久 (スライド映写担当: 金野 晋、平松毅久)

(1)開会の挨拶: 萱嶋 泉 10:00 ~10:04

(2)自己紹介 10:04 ~10:55

(3)講演午前の部 11:05 ~12:05

①池田博明「沖縄合宿予告編」(スライド)

②谷川明男「日本産イセキグモ属のクモ類」(スライド)

(4)総会 13:10 ~14:35 □ 詳細は下記別項参照

(5)講演午後の部 14:45 ~16:28

③畑守有紀「ミズグモの交尾行動について」(VTR)

④新海栄一、山川 守、池田博明「丹沢山地のクモ類——クモ相の特徴と分布境界線——」
(発表者: 新海栄一) (スライド)

⑤新海 明「東京蜘蛛談話会30年の活動記録」(スライド) (発表者: 新海 明、新海栄一)

(6)懇親会 17:00 ~

30周年を記念して、萱嶋 泉、松本誠治、高橋 登の各氏より祝辞。

§1997年度総会報告§

議長に谷川明男を選出後、以下の承認及び討議が行われた。

(1)承認事項

①決算 p. 2参照 会計監査鈴木成生より、決算には問題ないとの監査報告がなされた。

②予算 p. 3参照

③合宿(詳細はp. 4参照)と沖縄県名護市との共催

④千国安之輔氏へ「KISHIDAIA」「談話会通信」を寄贈

⇒ 氏より退会の申し出があったため、クモ学に対する長年の功績を鑑み提案される。当会には名誉会員等の規定がないため、寄贈の決定を総会の議決によった。

⑤都道府県単位のリストの収集事業 (30周年記念事業)

⇒ 発表する場所が失われがちな関東以外の道府県単位のリストを、「KISHIDAIA」に収集掲載する。散逸してしまうと後に収集することも困難になることも考慮。また当会のみならずクモ学全体にも寄与できるとして。但し「KISHIDAIA」は会誌でもあり、基本的には会員の投稿を原則として分量、予算、内容評価等の規定を運営委員会で作成する。

(2)討議事項

①会費値上げについて

会の収支状況(p. 2~3参照)からも明らかですが、会の運営は赤字体質となっています。経費節減等にも限界があり、赤字を補填しているプール金の残金を念頭におくと、会費値上げを具体的に考える時期だと思われます。そこで来年度をメドとして、運営委員会において詳細なシュミレーションをおこない、値上げ金額、時期等を会員のみな様に提示する予定です。最

終的には総会承認後、規約改正を経て実施されます。

(3)その他

「KISHIDAIA」編集についての報告

1997年度は前年度の繰り越しを含めて、4号(71~74)発行する予定です。

71号は6月発送(編集終了)、72号は8月、73号は12月、74号は1998年3月の発行予定です。
なお原稿の締切りは発行の1ヵ月半前になります。(締切詳細は直接編集担当まで)

今年度より編集は下記の二人体制でおこないます。投稿先が変わりますので、ご注意ください。

《投稿先》〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 池田博明
《編集委員長》〒215 神奈川県川崎市麻生区東百合が丘4-38-12 木村知之

総会・例会参加者(27名・50音順敬称略)

赤羽尚夫、池田博明、梅林 力、小澤實樹、笠原喜久雄、加藤むつみ、金野 晋、萱嶋 泉、
木村知之、工藤泰恵、小峰光弘、笹岡文雄、貞元己良、佐藤幸子、新海 明、新海栄一、
鈴木成生、高橋 登、谷川明男、千田高史、畑守有紀、伴 満、平松毅久、古浜 隆、
松本誠治、安田明雄、和仁道大

(記録：笹岡)

↓↓ 「KISHIDAIA」編集からのお知らせ ↓↓

72号で大熊千代子さんの追悼を致します。6月30日(必着)池田までに原稿をお送り下さい。また総会で承認された都道府県単位のリストを投稿する方は、編集担当に予め相談をお願いします。さらに今後クモの毒について何か、まとめた誌面を考えています。

★1997年度の各担当者は下記の通りです。

事務局：平松毅久 〒350 埼玉県川越市上戸91-3 瀬尾荘202 ☎0492-33-8792

会 計：安田明雄 〒231 神奈川県横浜市中区元町5-219 ☎045-641-0763

(郵便振替 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会)

「KISHIDAIA」編集：木村知之 〒215 神奈川県川崎市麻生区東百合が丘4-38-12

☎044-955-1610

投稿受付 池田博明 〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 ☎0465-82-2105

「談話会通信」編集：笹岡文雄 〒170 東京都豊島区北大塚3-12-21 ☎03-3918-1945

会費は単年度 一般¥2,800 学生¥2,000

※※近況つれづれ・昨今東西※※ (総会出欠ハガキから転載・原文一部修正)

□加村隆英(大阪府茨木市) 元気でやっております。3月中旬に与那国島と波照間島に行って、ちょっとおもしろいワシグモを採りましたが、研究そのもののほうはいまひとつはかどっていません。

□畑守有紀(大阪府交野市) 家の中のシモングモの個体数が年間通して一定のような気がします。けれど見つける場所は、二階の机の上だったり、一階の本棚だったり、廊下だったりと常にちがう場所でそれも一匹しか一度に見ません。とりあえず、ずーっと家の中で生殖、繁殖しているようなのです。うーん、どうやって相手を見つけているのか不思議です。

□山本一幸(兵庫県美方郡浜坂町) 1997年新年早々、日本海沖で沈没したロシアのタンカーより流出した重油が但馬海岸沿岸に漂着し、その除去作業に休日ほとんどを費しました。イソタナグモの生息が確認された岩場にチョコレート色の重油が厚くベトリと付着しており、壊滅的な状態です。ナミキソウやスナビキソウなどの貴重な海岸植物にも被害が及び、今後の自然環境への影響を心配しています。

□中平 清(高知県吾川郡春野町) クモ類とは遠い親類筋にあるとされているカニ、その中で純淡水産(日本で唯一種という)であるサワガニにひかれ、その観察にのめり込んでいる、といった状態です。何かクモと共通した点が見付かるかな、と楽しみもありますが、目下、水生生物であるこのカニが水におぼれることを知って、びっくり仰天、といったところです。

□木庭 奏(熊本県山鹿市) 通信紙を何時も興味深く読ましていただいております。もう、家の周囲から外へ出ないと蜘蛛を求めての動きは不可能な程、環境が変わってしまいました。自分自身の姿も変わっていったのかも知れません。

□石野田辰夫(宮崎県宮崎郡佐土原町) 巨星は去りぬ。近年は淋しさが身にしみ、過ぎにし事に想いが走りますが、これが大自然の営みでしょうか。宮崎はコガネグモが5cmにも満たない網を張り、大の字になり頑張っています。4令位かな?と思っています。ウメの花が散り、今ボケの花に移りました。3月3日です。小枝にクモ糸が輝きはじめました。山野に足を運ぶ時が近づいたようです。ニュースにもなりませんが、これ位で総会の充実を祈り上げます。

△吉田 哉(山形県山形市) 最近の研究から遠ざかっています。あたたかくなったらまた研究にとりかかりたいと思っています。

△牧 孝匡(栃木県河内郡南河内町) 栃木県に来てから、談話会ともごぶさたしております。けれども、キシノウエタテの飼育は相変わらず行っております。昨年(1996年)11月、1984年から飼育していたキシノウエがとうとう死にました。12年2ヶ月の生存期間でした。機会がありましたら、生活史のまとめとして、脱皮・産卵回数・幼体数などを発表してみようかな、と考えております。

△笠原喜久雄(埼玉県浦和市) 相変わらず急けていて申し訳なく思っていますが、冬芽が裂開し始める時期になると落ち着いていられなくなります。

△西尾三枝子(埼玉県川口市) 集中してクモと仲良くなりたいと思いつつ自然保護活動に時間がとられて苦しんでおります。市街化された川口市内とわずかに残る自然見沼田んぼとのぼさまにまだオニグモはいるようです。子供達に声を掛けてオニグモ調査(?)をしたいと考えています。この事で何かアドバイスがありましたらお教え下さい。

△野崎文江（埼玉県入間郡毛呂山町）昨年の見沼の採集で感じたことを申し上げます。金崎の森、芝川は昭和35年頃、社会調査をしていた場所で金崎の森の荒れた（ゴミが多く）のにはおどろきました。それと、すぐそばまで住宅があり完全にかっての森のおもかげがありませんでした。クモもジョロウグモ（人家の庭や人家に近い林に多い）とごく普通のクモ（人家のまわりにいる）がみられて、かつては木曽呂のバス停の裏は全体が山林で見沼田んぼは川口まで続いていました。運河はその頃よりも宅地化が始まり水が枯れてしまいました。見沼自然の家のような屋敷林にかこまれた農家が点在していました。今はその当時の自然もこわれ、川岸にあって木などもまばら自然が失われ、クモの種類もすくなかったと思います。もとの自然がかえってきてほしいと願っています。

△和仁道大（千葉県千葉市）今年の観察会は千葉県となり世話人の一人として名前が出ていますが未だ何もしていません。他の世話人の人達と連絡をとりその内下見をしなくてはと思っています。

△長島 充（千葉県佐倉市）入会して3年半、印旛沼周辺のクモのファウナを研究しております。現在、31科 220種になりました。今年から佐倉市のクモ類調査に参加させていただきまだまだ種類が増えそうです。

◇石川みどり（東京都杉並区）このところ欠席ばかりしておりますが、5月18日「船橋県民の森」は伺いたいと思っています。一ぱんに蜘蛛を嫌う人多く、話題が出れば、老骨にむち打って（？）どんなに蜘蛛がチャームアップか強調しています。

◇梅林 力（東京都杉並区）特に変わった事はありませんが、自分のやりたい事の準備を少しずつ始めているところです。もう少し暖かくなると、クモも活動を初めてくれるので、楽しくなります。

◇小澤實樹（東京都世田谷区）なにしろクモ個体数が少なくなったのか、観察不足なのか、そんな実感のこの頃です。

◇利岡 匠（東京都世田谷区）つい先日、パソコン通信を始めました。

NIFTY ID: CXXQ3321 おかげでモニター画面と対峙する時間が多くなりました。

◇新開 孝（東京都清瀬市）カマキリモドキとクモの関係の続報をはやくまとめようと思っています。

◇中島祥吉（東京都町田市）休会中なのに、会報等お送り下さいましてありがとうございます。毎回楽しく拝見しております。今回も出張で返事が遅れました。4月20日の盛会を祈っております。

△佐藤幸子（神奈川県横浜市）2月18日この頃になりまして寒い日が続き、まったく冬ごもりの熊と同じようになりました。家の中でもオオヒメグモ♀の死体が落ちていました。土に帰してやりました。

△谷川明男（神奈川県横浜市）コガネグモ科の整理をしています。現在オニグモ類を主に検討しております。ご不用の標本がありましたらぜひ活用させて下さい。

△新村 誠（神奈川県川崎市）冬の間は野鳥で忙しく、折角見たクモもすっかり分からなくなっていました。今年は森林の方も何かとスケジュールが多いのですが、なんとか合間を縫って教えて頂く機会を持ちたいと思います。

* 出欠席のハガキをいただいた方々 （50音順敬称略）

出席：萱嶋 泉、新海 明、新海栄一、鈴木成生、松本誠治（5名）

欠席：鶴崎展巨、古川 渉、水野陽介（3名）

三月二十日から二十三日まで性懲りもなくまた高知へ行って来た。95年の夏合宿以来と言いたところだが、去年の三月末以来約一年ぶりである。今回は夜行バスの旅で（往復22000円余り）、十九日の夜八時新宿発で翌二十日の朝七時頃高知駅着。曇り空でやや肌寒いが心持ち関東地方より暖かめであった。朝食後レンタカーで合宿の行われた夜須町手結へと向かった。まず合宿初日の夜間観察ルートの「林内基地コース」あたりをボチボチ見て回ることにした。そう名人たちにあやかってムツトゲイセキグモやツシマトリノフンダマシの卵のうなどないものかと…まず林縁部でゴミグモ幼体の網が目にとまった。こいつは横向きに網にとまっていたのだが、本来観察者の方を向いているべき腹部背面がよじれて垂直上方を向いていた。おどかしてやると網の下方に逃れた（この時は普通の体勢だったので奇形ではない）が、再度占座位置に戻ったときにはまた逃れる前の姿勢をとった。こういう格好をしたい気分だったのだろうか？このゴミグモの網の近くには5頭のシロカネイソウロウグモがしおり糸を引いてぶら下がっていた。シロカネグモ一種の幼体（おそらくチュウガタ）の網付近でも数頭が同様の格好で見られた。筆者は埼玉県の本本市で2月落葉樹の枝に残った枯れ葉の中で越冬中のシロカネイソウロウを採集したことがある。高知で同種がどのようにして越冬するかわからないが、春になってからどうやってホスト或いはその網の存在を知るのだろうか？視覚があまり発達していないと考えられるので、おそらく何らかの化学物質を感知しているのではないだろうか。ヒサカキの花のガスにも似た異様な匂いの立ち込める中林内を探索したが、談話会屈指の節穴の上お彼岸当日で墓参の人が続々やってくるわ雨が降り出すわで早々に大物の卵のう発見はあきらめることにした。我ながら実に根性がない。大物は見つからなかったが、網にいるヌサオニグモの幼体やアシブトヒメグモの♂成体を見つけるなど南国らしさは多少なりとも感じる事ができた。あとクモではないが、クサグモの廃巢を暴いていたら越冬中とおぼしき赤褐色の地に黄色い模様と黒い斑紋を持つきれいな小型（約4mm）のテントウムシが出てきた。次の日たまたま見つけた「四万十の昆虫たち」（高知新聞社刊）という写真集に載っていたのだが、アミダテントウ *Amida tricolor* (Harold) といってキジラミなどを捕食する食虫性の南方系種らしい。初めて見たので感動してしまった。

次は合宿二日目午前中の採集場所夜須川へ移動した。ここで我々一行が採集している時中年の農家のご夫婦がご親切に缶ジュースを差し入れて下さったのを参加者の皆さんもご記憶のことと思う。あの時のお礼が言いたくてあてはないが（お名前を覚えていただけなかった）、行けば何とかなるだろうと思い行くことにした。目印の農免道路に入って探してみたが、折からの雨で農作業をする人もなくどうするか迷っていると一人のおばあさんが畑仕事に出て来られた。ダメで元々と思い事情を説明したところ、わざわざ心当たりを探して下さい。幸い2軒目で尋ね人山崎さんに巡り合えた。あいにくご主人はご不在で奥様だけだった（実は奥様の顔を忘れてしまっていたが…）がお礼を言う事ができた。そ

の山崎さんのお宅の前にはジュースの自動販売機があった。山崎さんの奥様も「ほんの軽い気持ちでしたことなので礼には及ばない」とおっしゃっておられたし、突然押しかけてかえってご迷惑だっただろうが、担当者として至らぬ事だらけではほろ苦い思いの残る宿舎だっただけに尚更に残る嬉しい出来事であった。自己満足かもしれないが、今回お会いできて良かったと思う。また小降りとは言えわざわざ雨の中人探しにお付き合い下さったお婆さんどうもありがとうございます。その後雨も上がったので手結に戻り数頭のユアギグモ一種の生息（網にいる個体と網だけ張って端の岩肌に潜む個体あり）を確認して市内に戻った。

次の日は朝から雨である。おかしい。日頃の行いは良すぎる筈なのに…この日は午後から中平清先生宅へ伺う予定である。過去に何度か邪魔しているにもかかわらず、乗ったバスが途中で変な方角へ行き始め途中下車して雨の中を歩く羽目になった。やっと目指す芳原のバス停に辿り着いたが、お宅の近くまで来ながら道に迷ってしまった。何の事はない道を一筋間違えていたのであった。約束の時間に30分以上遅れてしまったが、暖かく迎えていただいた。相変わらずお元気で最近ではサワガニに興味をお持ちとのこと。時々水辺を離れて山の方にいるらしいが、何をしているのかわからないので調べてみたいと言われていた。ちなみにサワガニは水に沈めると溺死するそうだ。こちらは今興味のある事を幾つか話したところ、1. 調べたこと観察したことはどんな些細な事でも「書く」（文章にして発表する）。それが後で研究する人のためになる。2. 他の人がやっているテーマでも見る目が違えば全く同じ結果になるとは限らないので、遠慮せずに興味のあることはどんどんやるべきである。以上2点を強調しておられた。もっとも当方「かく」といっても恥だけでその上非常に遠慮深い性格なので、かなりきつい注文ではあるが…ふと見せられた「100歳にチャレンジ」（後述）という本に先生のことが紹介されていた。今後「私と生き物たち」の続編も予定されているという。奥様とご一緒にお宅の前で見送っていただき、「100歳まで頑張ってください」などと軽口を叩いておいとました。

次の日からはそれまでとは打って変わって好天に恵まれ、すっかり春らしい陽気となった。桜も一気に五分咲き近くまでいったようだ。この日は友人と遊びに行ったり飲んだりして過ごし、翌二十三日の午後二日酔いのふやけた頭と体を持って余しながら、その昔科博の小野展嗣氏がマメイタイセキを採集されたことで有名な筆山へ行った。別に採集するつもりもなかったが、ヒサカキの葉裏で一見ホシミドリヒメグモに似て非なるクモの♂亜成体を捕獲した。高知から帰って数日で成体になったが、今のところ正体不明である。最後は近々取り壊す予定の播磨屋橋の見納めをした。はっきり言って笑いの種にしかならなかったちゃんな橋ではあったが、なくなると聞くと何となく寂しい気がしないでもない。

こうしてほとんどぶらぶら遊ぶか飲んだくれるだけの旅ではあったが、いつか高知のクモを真面目に調べてみようと思っている。というよりそれを口実に遊に来るだけかもしれない。いやきっとそうだろう。とにかく私にとってはついふらふらと行きたくなる不思議な魅力のある所である

参加者（50音順、敬称略）：赤羽尚夫、押田房子、笠原喜久雄、加藤むづみ、
小峰光弘、笹岡文雄、貞元己良、谷川明男、中野隆雄、新村誠、平松毅久、
安田明雄 以上12名

カネコトタテグモ科 カネコトタテグモy

トタテグモ科 キノボリトタテグモF, y

エンマグモ科 シマミヤグモF, M

ヒメグモ科 オオヒメグモF, m, y ムナボシヒメグモy

カレハヒメグモF, f, y アシブトヒメグモf, m, y

ヒシガタグモy シロカネイソウロウグモy オナガグモy

コホラヒメグモF

サラグモ科 ヘリジロサラグモM

コガネグモ科 オニグモy ジョロウグモe ヨツデゴミグモy

トリノフンダマシsp y

アシナガグモ科 シロカネグモsp y ウロコアシナガグモm, y

ヒラタグモ科 ヒラタグモF, y

タナグモ科 クサグモy アズマヤチグモF シモフリヤチグモF

キンダグモ科 イオウイロハシリグモf アズマキンダグモy

コモリグモ科 ウツキコモリグモy

ササグモ科 ササグモy

フクログモ科 ムナアカフクログモy ネコグモy クロサワフクログモF

シボグモ科 シボグモy

カニグモ科 ワカバグモy

エビグモ科 アサヒエビグモy キハダエビグモy

ハエトリグモ科 ネコハエトリy メスジロハエトリM, m, y アリグモy

ヤサアリグモy

以上37種

1996年「小網代」採集観察会の感想！！（関東学院中学の3人から）

☞ 第2回7月14日に参加して

2年 石渡大輔

10月20日は三崎口の小網代という所へ行った。「東京クモ談話会」という会にくっついて行ったのだ。ここでぼくは色々な新しい発見をした。若いクモにはγという記号をつけることや、見たこともないクモを発見したり、クモ以外にも新たな植物を発見したりした。特にある植物に入って組織を変えてしまって葉の裏に赤い約2mm程度のぶつぶつができていたのを見つけた。他にもいろいろなこの会の人たちが来た。群馬県から来たという人もいたが、ぼくはそんなに遠くはなれた所に住んでいないので少しほっとした気持ちと罪悪感を感じた……。その人たちは初心者のぼくたちにとっても親切にクモのことを教えてくれた。クモ以外の植物のこともくわしく教えてくれた。これからはぼくたちはこれをきっかけにして、クモのことをもっとくわしく知りたいと思っている。

2年 坂田大輔

クモは自分たちの生活にもっともよくかかわっている虫の一つだと思う。そんな身近にいる虫であるにもかかわらず、その生活や種類などをほとんど知らない。恥ずかしいことだが、クモに少し関心を持つまでは、僕が知っているのは、ジョロウグモやオニグモくらいのものであった。そのオニグモでさえ数々の種類があるのだから知った時には驚いてしまった。だから、会を通して少しでも多くの名前を知り、自分が大人になった時、そのクモの名前を教えてやることぐらいはできるようになりたいと思う。

2年 三川英之

僕は新海先生に会う前はクモやミミズなどの虫はきもちがわるくてあまり好きではありませんでした。そんな僕がクモさい集に行くきっかけになったのは、クモはおもしろいと思ったということでした。学校やクモさい集で新海先生がクモについていろいろなことを教えてくださいました。クモはみな毒をもっているということ、土の中にも住んでいるということ、あみの形だけで何のクモかわかることなど、初めて知ることばかりでした。そのような所からだんだんクモのことがきょうみぶかくなってきたことからでした。今回のクモさい集ではたくさんの種類のクモを見ることができました。いっしょに行動していた人にクモの脈をみせてもらいました。途中で雨に降られてしまい中止になったのがとても残念でした。今回のクモさい集からもまた、新しい発見がありました。僕のクモに対しての夢は、新しい種のクモを見つけることです。いろいろ教えてくださいましたかたがたありがとうございます。また行く機会があったらそのたびはよろしくおねがい致します。新しいクモを見つけるまで一生けん命がんばりたいと思います。

（学年は採集会参加時のものです。原文ママ）

「鳥海山麓の真正蜘蛛類たち」に接して――阿部茂さんを悼む

新海 明

1996年の晩秋のある日、山形在住の阿部茂さんの奥様から一冊の本が送られてきた。そして、そこに阿部茂さんが亡くなられたことが認められていた。この本「鳥海山麓の真正蜘蛛類たち（著者自刊）」を開けると、その序に「クモの織り成す模様魅せられるとともに、その仕草にも魅力を感じて没頭して以来、幾年月が過ぎ去ったこの間に酒田市立高等学校の研究紀要に、東北の自然に、北地等に載せたもののほかに、折々書き貯めたものをそのままにしておくのも、偲びなくなんらかの形で製本したいと考えていた」とあった。目次に転ずると「糸さばきの小動物」「雑木林と子守グモ」「容器の網を作る小動物」「蜘蛛の魅惑」「鳥海山麓の真正蜘蛛類」と続いている。

この中で私が興味を惹かれたのは江戸時代末期の本草家、松森胤保によるジョロウグモの記載だった。松森に関しては慶応大学の磯野直秀先生による詳細な論考があり、かつて私は磯野先生から松森による蜘蛛の図を見せていただいたことがあったからだった。また、ヤサガタアシナガグモの生態の記述やコガネグモの分布についても得ることがあった。そして何よりも、東北酒田の地で教職の傍らで長年にわたり、クモの研究を続けてこられた阿部さんの姿を重ねて、日本各地でこのようにクモの研究をされている方々との交流について、もっと活発にしなければと改めて考えさせられたものである。

阿部さんとの出会いは、1984年千葉大会の折りにたまたま同室になったことだったと思う。以来度々お会いして楽しいお話を伺うことができた。中でも松本大会での、とある夜に東北地方の方言による最短の会話についてが印象深い。私はかつて知人から「どさ（どこへ行くのですか）」「ゆさ（お風呂に行くのですよ）」という会話が最短だと聞いていたのだが、阿部さんによるとそうではなく「け（どうぞ食べなさい）」「く（はい食べます）」というのがあるとのこと。たった二文字の会話文に一同びっくりすると同時に、大笑いとなったものである。楽しい思い出が残り、また一人なつかしい方がその彼方へ旅立たれてしまった。

ご冥福を、お祈りします。

※※ 図書紹介 ※※

「100歳に挑戦」（リーブル出版）¥1300

高知在住（一部出身者も含む）の70代後半から102歳までの元気なお年寄り13人（だったと思う）への取材をもとに構成されている。90すぎで行商に出るおばあさん、80後半で現役の漁師、102歳のライダー等多彩な人々に混じってわが東京蜘蛛談話会会員中平清さんが「鳥帽子山南麓の…少年の目をしたファールだった」というキャッチフレーズで紹介されている。肩の凝らない内容だが、高齢化が問題になる中で老いも若きも元気の出る本である。高知県内の出版社のため全編ふんだんに土佐弁が出てくるので土佐弁をご存じない方にはやや苦しいところはあるかもしれないが、ニュアンスが伝わればなかなか楽しめる。

（平松）

各地の同好会から ③ 1997年

新海 明

日本には東京蜘蛛談話会の他にもクモの研究グループがいくつかあります。今年もこれらのグループの定期刊行物などの活動内容を紹介したいと思います。興味を持たれた方はぜひ入会されてみてはいかがでしょうか。

* 関西クモ研究会 (会長：西川喜朗, 97年からは山野忠清)

会報「くものいと」を年2～3回発行。採集会・研究会例会などを年数回実施。

くものいと 21号 (1996. 12. 31発行)

- 加村隆英 ----- 千島列島探訪記
- 東條清 ----- 雨の日のクモ採集紀行
- 河井安子 ----- 採集会に参加して
- 西川喜朗 ----- 追手門学院大学内のトタテグモ類
- 長谷川夕希子VS畑守有紀 ----- タランチュラ対談
- 吉田真 ----- 関西クモ研究会例会の報告

入会申し込み 〒567 茨木市西安威 2-1-15 追手門学院大学生物学研究室内
関西クモ研究会

Tel 0726-43-5421 (内線 5113 西川研, 5106 加村研)

会 費 年1000円

* 中部蜘蛛懇談会 (代表：村上 勝)

会報「蜘蛛」を年1回、「まどい」を年3回発行。採集会・例会を年数回実施。

蜘蛛 (KUMO) 29号 (1997. 2. 11発行)

- 吉田真・榊元敏也 ----- ゴミグモとズグロオニグモの網の枠糸について
- 福島杉人 ----- ヒメハナグモについて - 飼育記録から -
- 益田和昌 ----- 名古屋の倍足類 (Ⅲ)
- 益田和昌 ----- 三重県北部の倍足類
- 緒方清人 ----- ワスレナグモの集団住居について
- 緒方清人 ----- 福島県猪苗代町東邦大学磐梯ロッジ周辺のクモ
- 緒方清人・小笠原幸恵 ----- 名古屋市 of 真正クモ類について
- 永井均 ----- コデーニツサラグモの生殖器異常個体について

太田定浩 ----- 四日市のセアカゴケグモ
 緒方清人 ----- セアカゴケグモに咬まれる
 新海明 ----- 犬山城のキシノウエトタテグモとズグロオニグモの小道
 小笠原幸恵 ----- 短期間で成体になったヒメフクログモの一例
 小笠原幸恵 ----- スズミグモの越冬について
 小笠原幸恵 ----- 京都 知恩院境内のクモ
 田辺陽一 ----- キシノウエトタテグモの巣作りの撮影記

短報 須賀瑛文：三重県のクロガケジグモ，緒方清人：マダラヒメグモの新産地
 緒方清人：アシプトハエトリは集団越冬する，益田和昌：岐阜県可児郡御嵩町のヤスデ

入会申し込み 〒444 岡崎市東大友町字松花 86-1-103号 板倉泰弘 (事務局)
 Tel 0564-34-2753

会 費 年2500円 (準会員 「まどい」のみ500円)

* 三重クモ談話会 (本部：太田定浩)

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

しのびぐも 24号 (1996. 12. 31発行)

福島杉人 ----- 三たび クモ三題ばなし
 新海 明 ----- クロガケジグモは子育てをしない
 川村彩乃 ----- 三重クモ談話会に入会して
 三重クモ談話会 --- 四日市のセアカゴケグモを追う
 三重クモ談話会採集会報告

入会申し込み 〒515 三重県松阪市久保町 1843-157 貝發憲治 (事務局)
 会 費 年1500円

* 和歌山クモの会 (会長：米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行。総会・観察会を年1回開催。

和歌山クモの会会報 No. 6 (1996. 5. 20発行)

須賀瑛文 ----- ローレツ和歌山を歩く
 東條清 ----- セアカゴケグモが鶏肉を食べる
 山本喜美子 ----- くものある風景

稲垣成二 ―――最近採集したクモ数種について
稲田武彦 ―――セアカゴケグモ騒動で考えさせられたこと
和歌山クモの会事務局 ――和歌山クモの会総会と観察会報告
畑中和美 ―――観察会に参加して

入会申し込み 〒642 海南市日方 1156 東條 清 (事務局)
会 費 年500円

(前回の紹介で、和歌山クモの会の会報の「発行はない」としましたが、1991年から
毎年1回発行されていました。お詫びして訂正します)

***九州クモの会** はここ数年間、会誌の発行はありません。

***関西クモゼミ**

毎月1回、第2か第3土曜日から日曜日に滋賀県草津市の立命館大学で開催。

会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研 吉田 真 0775-61-2660

***東京クモゼミ**

毎月1回、第1日曜日に文京区の東京大学農学部で開催。

会費などなく誰でも参加できる。

東京クモゼミ報告(プリント)を配布。

連絡先 新海 明 0425-22-2605

⇄事務局だより⇄

会員移動 1997年 2月上旬～1997年 4月下旬 (敬称略)

(入会)

今井 正巳：〒229 神奈川県相模原市星が丘1-5-5

(住所変更等)

下謝名松栄：〒903-01 沖縄県中頭郡西原町字千原琉球大学教育学部理科教育

秋元 昇：〒224 神奈川県都筑区茅ヶ崎東2-23-20-2

長田佐智子：〒381 長野県長野市吉田3-25-18

(退会)

神田 登、清水 徹男(以上希望)、浅枝裕嗣(規約)、大熊千代子(逝去)

A detailed black and white illustration of a snowflake, showing its complex, symmetrical structure with multiple branches and sub-branches. The snowflake is centered on a dark, textured background. It has a hexagonal base with six main arms extending outwards. Each arm is further divided into smaller, intricate sub-branches, giving it a very complex and delicate appearance. The lines are sharp and well-defined, highlighting the geometric patterns of the ice crystal.

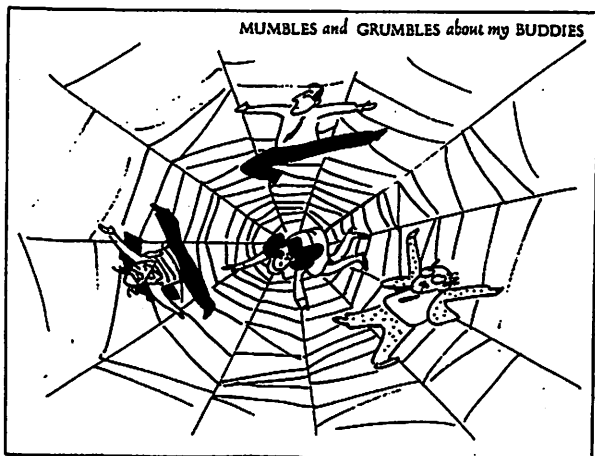
晩秋のおどろかな巨匠に、クモが空に浮かんでいるのを見かけることがある。雲ではない、虫の蜘蛛である。長く伸びた糸を風船がわりに、上車風流をうけて、草の先からあわとりと舞い上がったいく、フランスではこれを蜘蛛の衣のほつれた糸に見立て、「蜘蛛の糸」と呼ぶなどいう。日本の東北地方では、これが鬼ぢれもと、もうす

「この華館がやうなところの
で『露連』と呼んでいる。また
暖かみの残るうちに、来たるべき
客を待てるやうな事をしたのだら
う。柔らかな日差しが降り、暖
の空気は暖かたのものと向か
つてゐる。こんな華館に、来た
る客の残るやうな『ジョーキー
のボウル』を取らねえ、来客を
迎へる華館にやうなものはな
い。」

(サントリー広告より)

梅林 力さん提供

No. 90
付録1



同僚の志

連載小説
88

第三章 同僚のライフスタイル

十七

村松 友視
黒鉄ヒロシ 画

美輪明宏。その圧倒的な存在感が新たな伝説を作る

提供

「パルコ・ゴメス」p.14

笹岡

「毛皮のマリー」

「毛皮のマリー」
10月4日 (火) ~ 30日 (日) 17日 (月) 休演、21日 (金) 興行
パルコ劇場 (東京・渋谷区渋谷3-10-1・9F)
料金=7000円 (全席指定・税込)
※03-3477-5788 (パルコ劇場)
*11月1日 (火) 埼玉県、川口リリア・メインホールで公演あり。
※048-258-2000

心眼に降りくる秋の蜘蛛ひとつ 猫殿

洋の東西を問わず、神なる存在は時間がたつにつれて、次第に物分かりがよくなる傾向がある。最近の新興宗教の神々など、その恐ろしくなるほどの物分かりのよきである。いまに強盗も殺人も詐欺も姦淫(かんいん)もすべて容認してくれる神が現れるのではあるまいか。

逆に言えば、昔の神はそれだけ物分かりが悪かった。怒りっぽくて、嫉妬(しと)深く、短慮で、嫌味であった。

一回でも供物を忘れたらものなら、まことにあらたかに墓(た)に、毎度毎度きちんと供物を捧(た)げ、はてはて、ちよつとでも手順に手落ちがある、容赦なく厳罰をくだされた。

むろん、神の悪口を言ふなど、まじきことではあった。神はいかに大声で称(た)えてもたいがい聞いていないのだが、ちよつとでも批判めいたことを言わねばならぬ、必ず聞き咎(とが)めて、おそれるべき罰をくだすのであった。

ギリシア国はアテネの守護神、アテーナーもやはりそんな神であった。

女神はあるとき、アラクネーなる少女が「あたしってなんて織物が上手なんでしょう。きつとアテーナーの女神にも負けないわ」と呟(つぶや)いたのを小耳にはさんだ。

猿蓑倶楽部

小林 恭二

怒り狂ったアテー

ナーはアラクネーの布をまっぴたつに引き裂くと、腹立ちまぎれにアラクネーの頭をひっぱたいた。

屈辱(くじく)のあまり、哀れアラクネーは首をつた。女神は彼女の生命を救うかわりに、世にも醜(みにく)い生物に姿身させた。すな

わち蜘蛛(くも)である。かくして今日もアラクネーは呪(のろ)われた体でもって糸をつむぎ続けねばならないのだ。

掲出句は、かの哀れな少女アラクネーを憐(れ)しい(ん)で憐(れ)いた、わけではない。秋の日の心象風景のつもりで懸(か)けた。秋めいた心につつととおひてくる一匹の蜘蛛がいてもいいと思つたのだ。

書いた後で、アラクネーの伝説を思い出した。秋の日の心象には、悲しい伝説がよく似合うと思うが、いかが。

(作家)

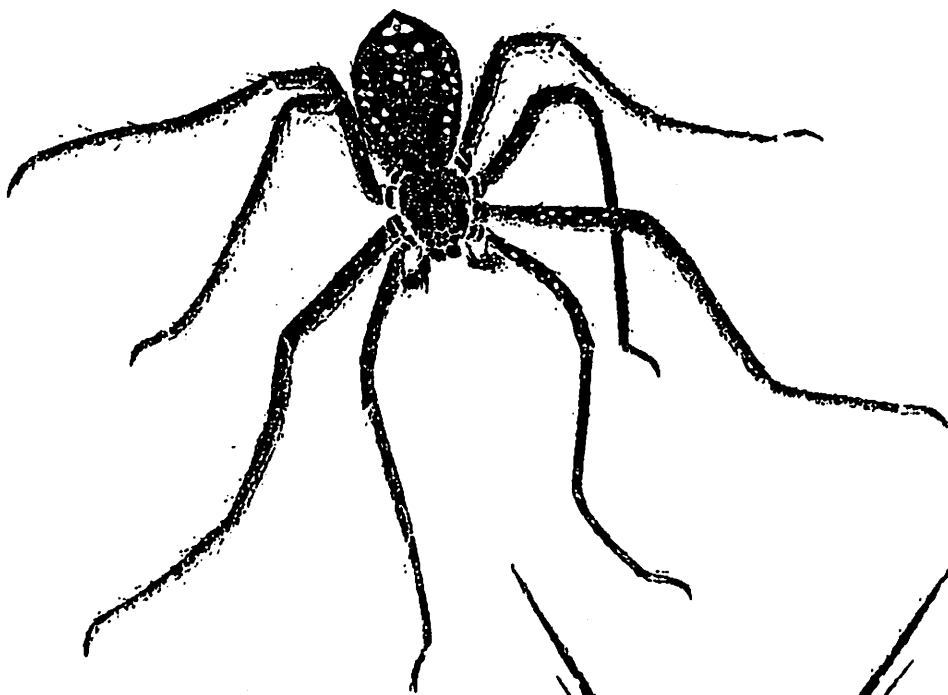


「伝記画集 北斎」 Richard Lane
 東京 河出書房新社 '95. 3
 p. 240 原図も加 出典「富嶽百景 三編」1840年代

クモの種類は？

2点とも提供笹岡

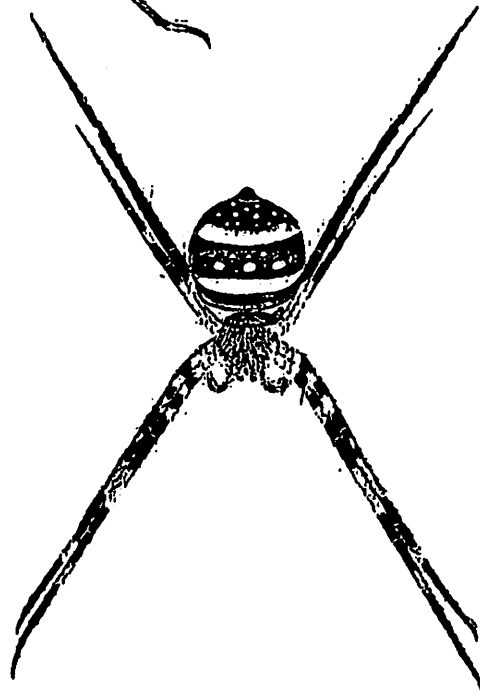
No. 90
 付録2



「彩色江戸博物学集成」

東京 平凡社 '94. 8

p. 363 原図カラー



●三六二頁 図版

「上図」筆者蔵「野原産虫図」より、これは昌章の「虫類図譜」を具島澤土中島五平が幕末に写したもので、丹波修治旧蔵、宝玲文庫旧蔵本である。

右の「ハラキリ蝶」はホタルガ、左はシロシタホタルガ。シロシタホタルガの後翅は広く白い点で区別されるが、この二種の成虫はよく似ている。しかし、幼虫の姿はまったく異なる。また、食草も異なる。ホタルガの幼虫はマサキ、ヒサカキを食い荒らし、シロシタホタルガはやや山地のサワフタギの葉を食べる。昌章は飼育してこれらの事実を確かめたのである。

「右下図」同書より、「スリバチムシ」はコウスバカゲロウ。成虫・幼虫・まゆを描く。幼虫はいわゆるアリジゴクである。成虫と幼虫をつなぐ日本産初の図であらう。

「左下図」大東急記念文庫蔵「諸家蟲魚蝦蟹雜記図」より。右上に「大徳昌章 昌馬録興」の印がある。図は数人の虫図を写したもので、木村養廉堂の「諸州蟲品」からとったものもある。「ハエキサミ」はカミキリムシ類?、「ヤブチラミ」はウスバカゲロウの一種、「メタタキ」はメマトイ類、「ダイハラ」はマメハンミョウ、「マメバイ」はハナアブの一種?、「スクミバチ」はアオスジコハナバチ、「ランダコメフミ」はクシヒゲコメツキ、「ウリバイ」はウリハムシ、「テウセンバチ」はアメバチ類、「コシボン」はスズメバチ。「長谷川」

◎三六三頁 図版

大東急記念文庫蔵「虫類図譜」より。

上はアシダカグモ。下はコガネグモ。コガネグモは網の中央にX字形の白い隠れ帯をつくり、その上に二本ずつ脚をそろえて止まる習性がある。尾張方言シホウグモ。アシダカグモは網の巣をほらず室内にすむ大型のクモ。尾張方言は刺毛(さしげ)蜘蛛、オオグモ。「長谷川」